opusdei.org

オプス・デイ創立八十 周年にあたって

聖ホセマリア・エスクリバーが、1928年10月2日、守護の天使の祝日に、ヨハネ・パウロ二世が使徒憲章Ut sitで述べられたように、神の霊感によってオプス・デイを創立してから、八十年を迎えます。

2008/10/09

平和と喜びの種まき

聖ホセマリア·エスクリバーが、 1928年10月2日、守護の天使の祝日 に、ヨハネ・パウロ二世が使徒憲章 Ut sitで述べられたように、神の霊感 によってオプス・デイを創立してか ら、八十年を迎えます。この機会に あたり、仕事と日常生活の聖化とい う、あらゆる時代の人々が歩むこと ができる道を開いてくださったこと に対して、三位一体の神に感謝を捧 げたいと思います。

教皇ベネディクト十六世は、まだ ラッツィンガー枢機卿であった頃 に、オプス・デイ創立者の列福式にあ たっての説教の中で、次のように述 べられました。「ホセマリア・エスク リバーは、その呼びかけ、つまり、 聖性を目指すよう励まし、人々をキ リストの下に集めるという呼びかけ を、自分にだけ向けられたものとは 考えず、何よりも他の人々にそれを 伝える役目を担ったと受けとめたの でした。そして、世界を巡って、聖 人になること、各自が生きるその場 所においてキリスト者となる道に踏

み出すよう人々を励ましました。こうして、神のみ旨に沿って生き、神のみ旨を愛するように人々を呼び寄せる偉大な行動の人となったのです。」

聖ホセマリアは、初代のキリスト者 について次のように述べました。信 仰の最初の兄弟である彼らの家庭 は、「福音の教えを宣べ伝える輝か しい存在でした。それは、当時の多 くの家庭と同じものではありました が、新しい精神で活気づいており、 知り合いや交際している人々に、そ の精神を広めていったのでした。私 たち現代のキリスト者も彼らになら わねばなりません。つまり、キリス トがお与えになった平和と喜びを 人々にふりまく人でなければならな いのです。| (『知識の香』30) そ して、教会の中における属人区の信 者の活動は、世界の中で行われる人 間的活動という場における「平和と

喜びの種まき」であると、表現していたのです。

聖座は、オプス・デイへの最初の法的 認可を与えるにあたって、この表現 を使用しました。1950年6月16日の 教令には次のように記されていま す。「オプス・デイのメンバーは、い つでもどこでも、キリストの平和 と、主における確かで完成された喜 びとを保ち、それをすべての善意の 人々に快く提供している。さらに は、その平和と喜びをすべての人々 に分け与えようと努め、神的な善と いう素晴らしい恵みを一人ひとりが 受けとめ、味わうように、ゆっくり と推し進めている。」

ベネディクト十六世は、信仰を持つ者にとって「平和」という言葉は、 もっとも美しい神の呼び名の一つであると言われました。父である神は、そのすべての子どもたちが、互いに理解し合うことを望んでおられ

るのです。それゆえ、「平和があな たと共に」、「平和があなた方と共 にしと言うのは、神が一人ひとりと 共に、また、皆とともにお出でにな ることを示しているのです。そし て、キリストは私たちの平和(エ フェソ .16) ですから、平和への望 みは、キリストの姿を人々に示す努 力に表れるのです。イエスと個人的 に付き合い、イエスとの友情を育ん でいくなら、揺るぎない喜びと平和 に満たされ、この世が与えることが できない神の平和(ヨハネ14,27)が 与えられるということを、人々が理 解できるように助けるのです。

私は、聖ホセマリアがこの「平和の福音」(エフェソ,15)を、説教や教えを通してどれほど熱心に広めていたか、また、彼自身がこの平和を常に心に抱いていたかを目の当たりにしてきました。彼の人生において、生命の危険にさらされた際や、教会や社会の困難な状況を前にし

て、とりわけその危機が蔓延してい た時期には、精神的にも大きな苦し み感じていました。このような状況 においても、聖ホセマリアが落ち着 きを失う姿を目にしたことはありま せんでした。そればかりか、周囲の 人々に、心の落ち着きを伝えようと いつも努めていました。

福音宣教を通して、教会は溢れんばかりの平和を広げることに寄与します。さらには、聖ホセマリアが述れたような生き方をするようキリスで大きな生き方をするように神の子がいて、理解とゆるしと和合、愛と平の種まきをするよう、お望みである。」(『鍛』373)

キリストを知らせることは、喜びを 種まくことでもあります。神の子と しての喜びは、周囲を取り巻く状況 に問題がないことから生まれるので も、単に心理的な要因から出てくる ものでもありません。他のあらゆる 人たちと同様、信仰を持つ人々も疲 れや病気や困難や心配の種、疑いや 逆境を経験します。しかしながら、 そのような状況の中で、自分が神か らとても愛されている子どもであ り、神を支えにすることができ、喜 びを失うことになっても、それを再

び取り戻すことができると知っているのです。

また、自己の霊的な弱さに襲われる ときも、神のいつくしみとの喜ばし い出会いによってその傷がいやされ るのですから、喜びが失われること はありません。父親の家を捨てて、 もっともあわれな奴隷状態に陥った あの息子は、取り戻された愛の宴会 に与るという幕切れを迎えました (ルカ15.11-32)。どんな迷いのと きにも、神の助けに欠けることはな いのだという確信を持って、聖ホセ マリアはこう書きました。「神であ り人であるキリストは、私を理解 し、私の世話をしてくださる。| (『鍛』182)

キリスト教の福音化の務めにおいて、他人への配慮、愛徳、自由の尊重など、人間的なことと神的なこととが交錯します。この点について、聖ホセマリアは、当時いろいろな対

立にあえいでいた南米の国アルゼンの1974年に訪問した際、多数いた南米の団欒に訪問した際、多強いて触れられていてがあるとでこうがでいれますが、下広手ではいるというにははまたのででははまからでででははません。でははまたのででででではません。ではないがです。上でではないですがの種まき人となるのですがある。

すべての記念日は、未来に目を向ける機会となります。オプス・デイ創立八十周年を迎えるにあたり、教会のこの小さな部分である聖十字架とオプス・デイ属人区が、社会の真っ只中において、1928年に神が聖ホセマリに託された使命を実現していてとができるよう神に祈り求めます。すなわち、人々の心に、福音の平和と喜びを社会に浸透させ、人

間味ある社会を実現していくことができますように。

オプス・デイ属人区長

ハビエル・エチェバリーア

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/opusu-deichuang-li-ba-shi-zhou-nian-niatatsute/(2025/10/30)